たわけではない。なお著者はデルタ農民について、「中国の他の多くの地域と同じく、この地域〔デルタ〕の高度の小作制は、富（プロスペラス）裕な稲作農民へ向けての福利の増大を伴って進展した」（一二一頁）と説明している。しかし、デルタ及び「他の多くの地域」の農民が「富裕」であったという指摘には、疑問を提示しておきたい。また微細な点に及ぶが、著者が東江・西江のより伝統的な生産関係を、「包農制」（一二一頁）と呼んでいるのは、明らかな誤りであるので指摘しておく。

本書は、中国革命を政治革命の面から論じており、農村における社会革命の意義をやや軽視しているきらいがある。しかし、従来の研究では十分に展開されていなかった農民運動の開始とその崩壊の要因について、一貫性をもたせた見解を示している点、多くの通説批判を行なっている点は、われわれ日本人研究者にとって大きな刺激になると思われる。

註

(1) Roy Hofheinz, Jr., "The Broken Wave—The Chinese Communist Peasant Movement, 1922-1928—" Harvard U.P. (1977) 355p.

(2) Roy Hofheinz, Jr., 'The Autumn Harvest Insurrection', The China Quarterly, no. 32(1967) 参照。

(3) 羅綺園「中山県事変之経過及現在」、『中国農民』第一期（一九二六年）、及び横山宏章「広東の客軍と孫文の政治指導」、『アジア研究』二三—四、（一九七七年）参照。

＊文中の傍点、及び〔　〕はすべて片山のものである。

新疆維吾爾自治区文字改革委員会編
維語正字詞滙（維漢対照）
新疆教育出版社編輯
漢維簡明小詞典

梅村　坦

中国の新疆維吾爾自治区内では最も多数の人口をもつウイグル族の言語であるウイグル語に関係する辞書二冊が、一九七六年に相次いで刊行された。これらは、中国の漢語拼音表記化の大問題と並行して進められてきた少数民族言語のラテン字表記政策の、そしてウイグル語の新正字法の実現・実用化の歴史的成果である。

古く、九世紀頃から、ウイグル族は民族的にも変様をしつづけたが、その言語表記——正字法——も大きく幾たびか変わってきた。そこで、まず、その跡をごく簡単に辿ってみることにする。

突厥テュルク時代のあと、イスラム化以前に於て、彼らは主としてソグド文字系の新ソグド文字（古代―中世ウイグル字）を用いて多くの聖典・証文類を遺したが、西方からのアラブ・ペルシャ文化の流入によって言語自体も影響をうけ、アラブ文字による表記がおこなわれはじめた。その後、文語として永くアラブ文字の使用が一般的となり、特に現在の新疆維吾爾自治区では、現在でもなお、壮年以上の年代の人々にとってはアラブ文字による筆記が慣行的であるらしい。

ところで、ロシア革命後、アルマアタなどに於て、何度かウイグル字の改革作業が進められ、一九三六年には、アラブ文字による表記法の改変と並んでラテン文字化の提案もおこなわれた。[1] このような文字改革の努力は、とりもなおさずロ語表記を媒介とする民衆教育の一環でもあり、結局ソ連領に於ては、何度かの試行錯誤の結果、アラブ文字見出しによる辞典が編まれるほか、[2] ロシア文字によるウイグル字表記も採用されて現在に至っている。[3]

一方、中国では、[4] 解放後はやくも一九五〇年十月に第一次語文座談会がウルムチで開催され、翌年はアルマアタの維吾爾語文会議を経て（アラブ文字表記の改革）、中国政府の文字改革政策にもとづく「民族語言文字研究指導委員会」が形成されるに及び、ウイグル字表記問題が新たな段階を迎えた。こうして五四年に、現行文字表の基礎となった文字表の改正案が提出され、五五年には第一次全国民族語文科学討論会（北京）が行なわれた。次いで五六年十二月に北京に設立された「中国科学院少数民族語言研究所」が現状の調査・研究を活発に開始し、五八年の第二次全国民族語文科学討論会（北京）に於て「維吾爾新文字字母表（初稿）」が採択された。さらに五九年の末、自治区第二次民族語文科学討論会（ウルムチ）は「維吾爾新文字方案（草案）」を採択し、自治区人民委員会、中央民族事務委員会の批准を経て六〇年から試行に入った。この草案は、六五年の「少数民族語地名的漢語拼音字母音訳転写法（草案）」でもそのまま確認され、七四年五月の「中国地名漢語拼音字母拼写法」で再確認を得、[5] 結局今回の辞書二点の刊行に至ったのである。この間多くの機関・研究所等が実用に際しての努力を払ってきたであろうことは後に触れるとおりである。

このようにして明らかになったウイグル新字の文字配列[6]は、英語アルファベット配列順どおりの26文字（但し発音はC＝tsh, H＝x, J＝dʃ, K＝kh, P＝ph, Q＝tʃh, X＝ʃ）の他に、g喉音のƢ、h音のḤ、qh音のḲ、ε音のƏ、φ音のΘ、y音のÜ、ʒ音のZが加わり、更にng、zh、ch、sh各合成字がウイグル固有の音並びにngを除く三字は中国音表記のために付加されている。いずれもアラブ文字表記との対照のもとに、前記一九三六年のラテン字案の際に考案された新

文字も改良のうえ使用されたものとなっている。

さて、このようなウイグル新字による二書の内容を次に紹介しよう。

A『維語正字詞滙』は文字通り語彙集である。表紙をあけると漢語赤色刷の毛主席語録があり、次頁はそのウイグル文。次にウイグル文の表題、その裏にウイグル文奥付。次にウイグル文の前言二頁、漢文の前言一頁。本文に入って、ウイグル文の「詞滙」編輯説明が四頁まで、続いて六頁までが漢文の編輯説明。七～八頁はアルファベット（Zまで）表記見出し目次。九―五六一頁までが、毎頁左側に見出しウイグル語の項、右にその漢文による意味を付した語彙集で、末頁に漢文の奥付がある。編輯説明は概ね次のように述べている（『　』内は筆者註）。

『ウイグル語の見出し項目に関するもの』

一、この語彙集は、三大革命運動及び日常生活における常用語、その他借用語、何種もの正書法をもつ語、あわせて八〇〇〇項目を採った。二、発音表順『cf目次』配列を採用した。三、動詞は語根を挙げ、変化例を並記した。変化例の場合、語根に音変化の生じないものと閉音節系の語の後には、-x,-ix,-ux,-üx 等の動名詞形を例示し、開音節系の語には -mak,-mək の形を示した。四、-qi,-lik,-lik,-siz (-luk,-lük,-sizlik,-sizlik) 等の形をとってもとの語と大きく意を異にしたり、正書法が変ったりする語も収録した。五、合成語は、一綴りのものだけを採ったが、若干の、分け書きか一綴りか結論の出ていないものは、分け書きとして『ハイフンを付して』連写の項に採った。六、語尾変化後に語音が変化して正書法に反してしまう語については、例を挙げて説明した。七、品詞の異る同音語は、それぞれ別の条とし、その品詞の頭字『i＝isim 名詞、p＝peil 動詞、s＝süpət 形容詞、r＝rəwix 副詞、等』を（　）内に註記した。八、ある語の分類『例えば、『Islam (din)／依斯蘭（教）』――din は「宗教」の如く、固有名詞や外来語・特殊術語の場合が多い』や使用法を説明する際には（　）で例示し、当該語は～記号で省略する『例えば『pər(～yastuk)／羽毛』は、pər yastuk「羽毛の枕」という熟語になることを示す』。

『以下は、中国語の意味部分に関するもの』

九、各民族の相互学習の便を計って、語彙ごとの基本的な意味について漢文による註記を施した。その場合には、㈠、一般的に品詞は註記しない。但し、一語が多品詞にわたったり、漢語での品詞が不明確な場合には〔　〕に註記した『動・名・形・代・副・量・后など』。㈡、一

部の語の意味や用法は（　）で例示・註記し、例文中の当該語は～記号により省略する。㈢、いくつもの音を有する漢字の誤読を防ぐために（　）内に『漢語拼音で』音註を付したものもある。㈣、転意語はセミコロンで区分した。㈤、一ウイグル語が、いくつかの語義をもつ時には、それぞれアラビア数字で示した。㈥、若干の科学技術語は、＜　＞で略語表記した『宗・植・物・語・数・化・医・薬など』。

以上の説明が語彙集本文にどの程度の有用性をもって反映されているか、という点になると、いささか疑問の点がないわけではない。が、それは本書の利用価値などを含めて後述することとし、今は、本書の性格を最も簡潔に表現していると思われる「前言」の次の一文を引いておくことにとどめる。「広範な工農兵群衆・革命幹部及び革命知識分子が新『ウイグル』文字を使用する過程で、正書法及びウイグル文学言語『文語』の規範化を行なう便利のためにこの『ウイグル正字語彙集』（試行本）を出版した」（『　』と傍点は筆者）。

続いて、B『漢維簡明小詞典』を簡単に紹介する。

内表紙は漢文、ウイグル文の順に印刷され、裏頁の奥付は漢文のみ。次に漢・ウイグル並記で毛主席語録、説明、目次、凡例、漢語の品詞の略号表があり、さらに、ウイグル語新旧字体（すなわちウイグル新字とアラブ文字）との対照表、漢語拼音音節索引がある。続いて本文が、漢語普通話の語音体系順に、一語につき漢語・漢語拼音・品詞略号・ウイグル語の順に三一三頁まで。次には附録として「漢語拼音方案」が、一、字母表、二、声母表、三、韻母表、四、声調符号、五、隔音符号、とそれぞれ漢維並記される。三一八～九頁が、中国各省・自治区・直轄市の名称にあてられ、その名称、略称とその漢語拼音、ウイグル名が列挙されている。三二〇～四頁には、新疆維吾爾自治区にある県級以上の行政区の名が漢維両語で並記されている。

このうちの「（出版）説明」によると、本書は本来、新疆工学院漢語教研室と、烏魯木斉鋼鉄廠が試編した「漢維常用詞滙」を、漢・維両族共同による三大革命運動の必要に応じて改編したものであるという。この改編にあたっては、新疆維吾爾自治区文字改革委員会、新疆工学院、烏魯木斉市第十四中学などの機関が参画している。語彙数は常用語・熟語あわせて五千六百項余りである。

以上の如く、Aに対してBは、ウイグル新字を使用して漢語と対照するという点の編集の仕方としては、比較的親切な体裁をとっているものである。

ところで従来、ウイグル語には、中国語を借用語として中国音どおりに導入してきたものも多いが、AB二書をみる

と、その現象にも興味深い点が見出される。例えばBで「共産党」をひくと、「党＝partiə」がありながら「gongchandang」とあってAもこれを採用している。しかし、「共産主義」は「kommunizim」であり、「社会主義＝sotsiyalizim」、「無産階級＝puroletariyat」、「資本家＝kapitalist」、「国際主義＝internatsionalizim」、「列寧主義＝Leninizim」、「民主主義＝demokratizim」、「資産階級＝burʒuaziyə」などの近代政治用語の他、「機器＝maxina」、「公尺＝metir」、「公式＝formula」、「亜州＝Asiya」（Aにはなし）、「雑誌＝ʒornal」、「原子弾＝atom bomba」、「激進的、方根＝radikal」（Bにはなし）、「電影＝kino（～院＝kinohana）」などのように、中国語を介さずに使用されるものもかなりある。また、「修正主義＝xiuzhengzhuyi」がABに採用されているかと思うと、「教条主義＝jiaotiaozhuyi」（AB）、「教条主義＝dogmatizim」（Bのみ）などの例もみられ、ウイグル語にとっての外来語の系譜は、現代的な意味に於ても重要な研究対象となるだろう。その点で、「自力更生＝əz küqigə tayinip ix kərüx」「独立自主＝mustəkil wə əzige-əzi hoja bolux」、「八路軍＝sokkizinqi armiyə」など、まさに現代的な政治用語がウイグル語として解釈導入されている点も注意をひく。

このように、ABを併用することによって現代新疆ウイグル自治区のウイグル語への学問的関心は、多くの分野から深められていくであろう。

それでは、辞書としては如何というと、Aは「試行本」とうたい、Bも「出版試用、以応急需」というように、はじめから完璧を期したものではなく、とくにBはAよりも一段と語彙数が少ない。就中、Aにおいて、テュルク系言語に特有の熟語の採用が少ないことは、語彙集という性格を割引いてみてもなお不満を禁じえないところである。尤も、当然のことながら、ひととおりの文法[7]をマスターしている者（漢族を含む）にとっては、この語彙集は有益である。一方、ウイグル族にとって、漢語を実用的に学ぶに際して（必ず文法書テキスト等が出版・使用されているに違いないが）、漢語拼音のないAは不充分であり、かといってBはまさしく「小中学生」または「（漢語）初心者」むけのものにとどまる。ただ今後は、Aの前言で謙虚に云うごとく、「大方の批判・意見」をもって更に語彙数・熟語をふやし、Aの編輯説明六・八にうたうほどには十分でない語彙実用上の説明や応用文例を豊富に採集することによって、より完璧なものに近づける努力とその成果を期待したい。

ともあれ「今や、新ウイグル字が全面的に推行されんとしている」（Aの前言）現在において、両書の果す役割は自治区に於ても、また広く言語学等及びそれらを利用する諸学にとってもまことに大なるものがある。最後に付言すれば、ま

すます拡大される日中人士の交流の中で、新疆維吾爾自治区訪問の門戸も広く開放されつつある（ウルムチが最近外国人に開放された）現在、両書の、より実用的利用も試みられてしかるべきであると思われる。

註

（1）李森「維吾爾文字的改革問題」『国内少数民族語言文字的概況』中華書局、一九五四、五九頁。

（2）Наджип, Э.Н., Т.Р. Рахимов; *Уйгурско-русский Словарь*, Москва, 1968.

（3）辞書の例としては、Кибиров, Ш., Ю. Цунвазо; *Уйгурско-русский Словарь*, Алма-Ата, 1961.

（4）以下、次のような文献に拠った。唐振宗『中国少数民族的新面貌』三聯書店、一九五三。羅常培・傅懋勣「国内少数民族語言文字的概況」『国内少数民族語言文字的概況』中華書局、一九五四刊所収。前註(1)。朱志寧「維吾爾語概況」『中国語文』一九六四―二所収。鄭達「動態――少数民族語言研究所成立」『中国語文』一九五七―一所収。王利賓・傅懋勣「我国少数民族語言科学研究工作的重要成就」『中国語文』一九五九―十所収。Наджип, Э.Н.; *Современный Уйгурский Язык*, Москва, 1960. 同英訳本、Nadzhip, E.N.; *Modern Uigur*, Moscow, 1971.

（5）『漢語拼音〈中華人民共和国地図〉地名索引』地図出版社、一九七四、附録一、二。

（6）前註(5)掲載のものも、今回の『漢維簡明小詞典』のものも、前註(4)の朱子寧論文に掲載された表と基本的に変りはない。なお、Рахимов, Т.Р.; *Китайские элементы в современном уйгурском языке, словарь*, Москва, 1970. も参考になる。

（7）簡単で断片的ではあるが、ウイグル語文法について中国では、耿世民「試論維吾爾語書面語的発展」『中国語文』一九六三―四、傅懋勣「従音和義的矛盾看現代維吾爾語的発展」『中国語文』一九六五―二、朱志寧「維吾爾語中的漢語借詞」同上五、などがある。

中世のシベリア・内陸アジア・東アジア

（アジア東部の歴史と文化、第三巻）

林　俊雄

ソ連邦における東洋学研究は、その伝統を誇るレニングラード、モスクワの種々の研究所ではもちろんのこと、地方でのそれもきわめて活発である。わけても注目されるのは、シベ